草小路鷹麿の東方見聞録

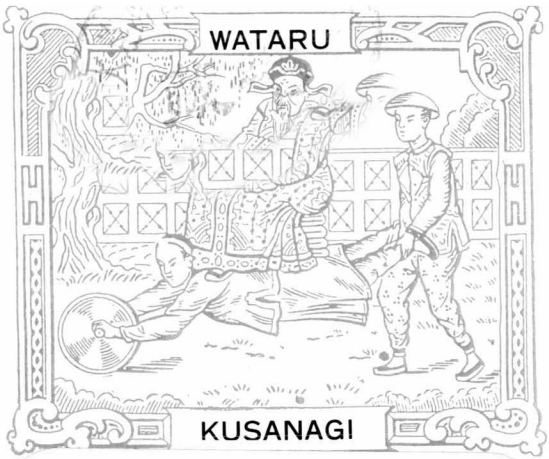
草薙 渉

Wataru Kusanagi

集英社

草小路鷹磨の東方見聞録

草薙 渉



草小路鷹麿の東方見聞録（くさのこうじたかまろとうほうけんぶんろく）

一九九〇年二月二五日　第一刷発行
一九九〇年四月一一日　第二刷発行

著　者　草薙　渉（くさなぎわたる）
装　丁　南　伸坊
発行者　若菜　正
発行所　株式会社集英社
〒101-50　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
編集部（〇三）二三〇―六一〇〇
販売部（〇三）二三〇―六三九三
製作課（〇三）二三〇―六〇八〇
印刷所　凸版印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1990 W. KUSANAGI, Printed in Japan
ISBN4-08-772729-7 C0093

草小路鷹麿の東方見聞録（くさのこうじたかまろ　とうほうけんぶんろく）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

①

『弥生子……。私はいま、東京にいます。東京は北区の田端という場所にいます。何だか自分でも信じ難いことですが、まぎれもなくあの、地図で見たり書物で読んだりした東京にいるのです。

私のいまいる場所は、暗くて、考えられないほど狭い部屋ですが、何人もの人々がこの一軒のアパートメントの中で生活しているそうです。この部屋の主人である正木尋氏が、そう説明してくれました。

正木氏とは今朝、京都の都ホテルで初めてお会いしたばかりです。想像していたよりもずっと大柄で、もの静かな紳士でした。私は正木氏と落ち合って、初めての新幹線に乗って、初めての東京へやって来ました。初めてといえば、私にとっては今日の

何もかにもが初めての体験でした。私の本籍地である京都の街でさえ、生れて初めて歩いたわけで、正直なところ、西条や神志麻とホテルで別れてからの私は緊張の連続でした。やはり書物や写真やテレビでどんなに知ったつもりでいても、現実の見聞には遠く及ばないということを……、文字どおり百聞は一見に如かずということを、今日改めて知らされました。

蟻の大群のような、まことにおびただしい数の人々……。洪水のような、すさまじい量の車……。果てることを知らないビルディングの列……。ところかまわず書きつけられた商業看板たちの自己主張……。蜘蛛の巣のように張りめぐらされた電線……。しつこいほどの交通標識……。空気までが脂っこく淀んでいます。

京都も東京も、都市というところは圧倒的な猥雑さに埋れています。初めて見る京都の街も東京の街も、私にははっきりとはけじめがつかないのですが、強いて言うなら、京都の街は『英国』と表記したイギリスを感じるのに対して、東京の街はカタカナで表記したアメリカを感じるというところでしょうか。それにしてもいったい、この都市というところに居住する人々は、この猥雑さの一つ一つを、ほんとうに理解して、消化できて暮しているのでしょうか。何やらそらおそろしい気になります。

弥生子……やはりあなたはお屋敷からは出るべきではないのだと、私はいま、そう確信しています。私が生れてこのかた二十六年間、自宅の門から一歩も出ることもなく生きてきて、今日初めて塀の外の空気を吸ってみた、それが結論です。世界には、知らなくていいことなど山ほどあるのだから……』

「手紙ですか？」と、背後から声がした。鷹磨（たかまろ）は書きかけの便箋の上にペリカン・トレドの万年筆を置いて振り返った。狭い玄関に、いま戻ったばかりの正木が、スニーカーを脱ぎながらこっちを見ていた。

「はい。毎日書くと約束したものですから」

鷹磨は後ろに向き直って、きちんと正座したままそう答えた。

「毎日……、ですか」と、部屋に上がった正木が少し呆れ顔で言った。正木の手には白いビニール袋が提げられていた。「よほど妹さんが可愛いんですね」

「はい、それはもう……、たった一人の肉親ですから」

鷹磨はおだやかに頷きながらそう答えた。何のてらいもけれんみもなかった。

「……」

正木は頬笑んだまま、小さく頭を振っていた。そのまま冷蔵庫を開けると、白いビニール袋から缶のビールや何やらを取りだして仕舞いこんでいた。
「僕がいないとき、喉が渇いたりおなかが空いたりしたら、この中のものを遠慮なくやってください」
「お気づかい、おそれいります」
鷹磨は丁寧に頭を下げた。
「なぁに、それでなくてもおたくの西条さんには法外な報酬を頂いているんだ」
「何ぶんにも、私にはそういう金銭的な感覚……というか、経験が皆無なものですから、何かとご迷惑をおかけします」
「まあそのへんはまかせてください。あなたをたった一週間お預かりするだけで、僕は五年間夢見てきたことが実現できるのですから」
「夢……？」と、鷹磨がけげんな顔で訊きかえした。
「……」
正木はちいさく頬笑んで頷いただけだった。
「それより、明日は府中の東京競馬場に何時に着けばいいんですか？」と、正木が訊いた。

「さあ、時間のほうはちょっとわかりかねます。昼頃という話ですが」と、鷹磨が頼り無さそうに答えた。
「僕もあの辺りは地理的にあまり自信がないので、じゃあ少なくとも十時にはここを出発したいんだけど……」
「おまかせします」
「しかし、疲れたでしょう。何たって二十六年間一歩も出たことのない自分の家から、今日初めて出て、おまけに京都から東京まで旅してきたわけですからね」
「ええ、しかし、目にする何もかにもが新鮮で、とても楽しいです」
「じゃあその手紙を書き終えたら、ひとまず街へ出てみますか。食事と……、何か洋服でも買いましょう」
正木は、スリーピースを着込んだまま きちんと正座している鷹磨を見ながらそう言った。
「じゃあどうぞ、遠慮しないで書いてしまってください」
正木はそう言って窓際に座ると、本棚から『ログハウスのすべて』と記された分厚い雑誌を取り出して読み始めた。
「はい、ではそうさせて頂きます」

鷹磨はちいさく答えて、また万年筆を手に取った。

『弥生子……。人間というものは実にうまく出来あがっていて、どんなことにも慣れることが出来るものなのですね。

私は今日初めて新幹線に乗車して、時速二百キロという速度を体験しました。始めのうちこそ、背中を押しつけられるようなスピード感に、一種の危機感を覚えたものの、ほんの十分もしないうちに、もうそのスピードに順応してしまっている自分に驚きました。

それから東京駅の改札口……、ここではもっと驚きました。人一人がやっと通れるような狭い改札口に客がどっと詰め寄せて、私もその中に取り込まれてしまったのです。数え切れないようなたくさんの人々に揉まれて……、わかりますか？　前も後ろも右も左も、まったく見ず知らずの人たちの軀が触れ合い、押したり押されたりするのですよ。そんな……、考えたこともないような怖ろしい状況にさえ、すぐに慣れてしまえるのです。

改札をぬけた地下道でも、私は足がすくみました。大勢の人々が続々とこっちに向

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

かって流れて来るのです。まるで川を遡って行く鮭になった気分でした。そして驚いたことに、すぐ前を行く正木氏は何でもないことのように普通に進んでいけるのです。そんな、無尽蔵に湧き出てくるような人の流れを、あたりまえの顔でだれともぶつかることもなく遡って行けるのです。私が躊躇したまま佇んでいると、「どうしたんですか？」と、とても不思議そうな顔をしておられました。私は大きく息を吐き切って、思い切って正木氏のほうへ進みました。正木氏はそんな私を見て、安心したようにまた歩き始めました。何と、まったく不思議なことに、私も前から来る人とぶつからずに進めるのです。きっと……、よくはわからないけれど、人間にはもともとそういう能力が備わっているのだと思います。無意識の中に、近づいてくる他人同士でその進路についての対話ができるような、そんな超能力が意識の下に埋めこまれてあるのです。そういう、ちょっと考えると信じられないようなことにも、私はあっというまに慣れていました。

思えば私たちのような生活環境……というか、状況についても、正木氏は大変驚いていた様子ですが、確かに世間一般の人々から考えたら、とても尋常ではないようです。私たちの家が、京都では名門の平安時代から続いている華族であるということも。

私が亡き父上の方針で生れてこのかた二十六年、ただの一度も屋敷の外に出ないで育ったということも。弥生子も二十年間、まったく同じ環境で育ってきたということも、正木氏はいちいち驚いておられました。私や弥生子にとっては至極当然のことであっても、じつは私たちがただ、その状況に慣れてしまっているというだけのことかもしれないのです。不思議ですね、まったく……。

何だかとりとめのない文章になってしまいました。私は今日、あまりにもたくさんの物事に一遍に出会いすぎてしまったから、だから頭の中が過飽和になってしまっているのだと思います。明日また書きます。何はともあれ無事に、そして元気に、吾妻下りの初日を送っていることをお知らせしておきます。

追伸。西条や神志麻や、お屋敷の人々に元気でいることを、何も心配いらないからと、伝えておいてください。

弥生子殿

平成元年四月吉日

東方にて　鷹磨』

封筒に住所と宛名を書きながら、鷹磨は執事の西条の言葉を思い出していた。「手紙というものは、住所と宛名を書いただけでは届きません。切手というものを購入貼付し、郵便局という役所に申請して初めて届くのであります」「切手……？　郵便局……？」「そのあたりの諸々のことがらは、どうか正木様にお尋ねください」「その正木様とおっしゃるお方は、このたびの私の吾妻下りの理由をご存知なのですか？」「まあ、おおよそのところは……」「どんなお方なのですか？」「私どももお会いするのは初めてのお方です。ただ若様をご案内頂けるようにと、亡き鷹遠（たかとお）様のご指名のお方でございます」「父上は、なぜその正木様を……」「さあ、私どもには詳しいことは……」

万年筆のキャップをして振り返った鷹磨ははっと息を呑んだ。本棚のところで、正木が逆立ちしていた。

「どうしたのですか」と、鷹磨が尋ねた。

「気にしないでください」と、真っ赤な顔の正木は言った。「一日十分以上は、こうして

倒立するのが僕の習慣ですから。それより、もう手紙は書き終ったんですか」
「……」
鷹磨はおだやかに頬笑んだまま、ちいさく頷いていた。
「その……」と、鷹磨が言った。亡き父上が名指しで指定したあなた様は、結局、何者なのですか……と、訊こうとして鷹磨は言葉を呑み込んだ。だれも教えない以上、それなりの理由があるのだろう。いずれわかることかもしれないし……。「郵便局という役所には、どうやって行ったらいいのでしょうか」
「郵便局……、ああ、ポストでよかったら商店街にありますよ」と、正木は言った。
「ＰＯＳＴ・ＢＯＸ」
鷹磨が首をかしげながら、嬉しそうにそう言った。英国人のような正確な発音だった。
「夕飯にはちょっと早いけど」と、正木が言った。「じゃあその手紙を出しがてら、街でも歩いてみますか。あなたにとっては初めての街を……」
「……」
鷹磨が嬉しそうに頬笑んでいた。

②

「その……」と、鷹磨が言った。「はたしてこんなことうかがってもいいものか……」
ユーミンが終って、タクローの唄が始まっていた。鷹磨は正木の右耳に口をつけんばかりにして喋っていた。
「いらっしゃいませ、いらっしゃいませ。本日は数ある遊技場の中から、当、人生ホールにお越しくださいまして、まことにまことにありがとう、ありがとうございます」
「え、何ですか？」と、正木は正面を向いたまま訊き返した。ＢＧＭばかりでなく、ひどい騒音の中だった。
「全機全台ゼッコーチョーゼッコーチョー、どなたさまもお時間の許すかぎり、ゆっくりとゆっくりとゆっくりとお楽しみください」
「ですから……、正木様は、ふだんはいったい、どういうご職業に就いておられるんでし

ょうか」
鷹磨が騒音に負けないような声でそう訊いた。
「何と言うか……。フリーのアルバイターとでもいいましょうか」
「……」
正面を向いたままの鷹磨が、わかっていない顔をしていた。
「アルバイターですよ、アルバイター」
「それは、どういった職業ですか」
「どういった……といっても、あなたの生いたちを聞いてしまった以上、ちょっと説明しにくいんですが……、まあ、定職を持たない浪人とでも言いますか……」
正木は自分の口をついて出た言葉の意外性に、自分でも可笑しかった。天クギで跳ねた銀色の玉が、まるで生き物のように盤面に乱舞していた。デジタルの数字が、7・7と並んで、正木は固唾を呑んだ。凝視する最後の桁に『8』と出て、がっくりと頭をたれた。
「つまりそれは、ボヘミアンということでしょうか」
右手でしっかりとハンドルを握ったままの鷹磨が、何やら納得した口ぶりでそう言った。
「ボヘミアン……。そんな結構なモノでもないですが……。アルバイトを続けながら、最

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.